

Crescendo

M E D I K I T A R T S C E N T E R くれっしえんど

2022.10
vol.149



ニュー・イヤール・コンサート2023

〜ピアソラ・ザ・ファイナル〜

夏の上の砂

佐渡裕指揮

シエナ・ウインド・オーケストラ演奏会

《ブラスの祭典2022》

加藤昌則の

「聴かぬなら聴かせてみせよう!!クラシック」

「オルガンふしぎ発見!!」レポート

ここはどこでしょう？

第9弾は、劇場の顔とも言える「パイプオルガン」です。写真は、8月に開催した、パイプオルガン見学・体験会「オルガンふしぎ発見!!」でのひとコマ。普段なかなか近くで見ることができない、演奏台付近の装置に興味津々!

夏の砂の上

劇作家の松田正隆が自身の生まれ育った長崎を舞台に描き、1999年読売文学賞を受賞した名作が、名匠・栗山民也の演出で宮崎に登場します。

まるで日常の風景が立ち現れているかのように舞台上で交わされる言葉たち。その言葉の奥で、登場人物たちの心情の揺れは幾重にも積み重なって描かれていきます。



撮影：若木信吾

◆実力俳優陣による上演

本作で職を無くし妻に家出された主人公・小浦治を演じるのは、田中圭。テレビや映画等多彩な活躍を続けながらも舞台作品への出演を欠かさない田中が、舞台公演で宮崎に登場するのは6年ぶりです。

本作に向けて、「松田さんの深みを持つこの作品をどこまで掘り下げていけるか、栗山さんの演出でどんな舞台になっていくのか、僕自身がどう体感していくのか……とても楽しみにしています」とコメントを寄せた田中。

田中が絶大な信頼を寄せる演出家・栗山民也の演出による本作で、田中の舞台俳優としての魅力が存分に発揮されることに期待が高まります。

夫を捨て家を出ていく妻・恵子を演じるのは、舞台や映像作品などで唯一無二の存在感を放ち見る者を魅了する西田尚美。本作で初めて栗山演出に挑む西田は、「共演者のみなさんと長崎の湿度を感じるような舞台を築いていけたら」と意欲をみせます。

若手実力派として多くの映像作品に出演する山田杏奈は、本作が初の舞台出演。「これまでの数少ない経験や価値観を、一度捨てられるような勇気を持って、新しくお芝居を始めるような気持ちで挑みたい」と真正面から初舞台に向き合う山田にも注目です。

さらに、新時代のバイプレイヤーとして注目される尾上寛之、第55回紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞した松岡依都美など、豊富な

舞台経験を持つ俳優陣が揃いました。

実力俳優陣の共演により、繊細に構築された作品世界を丁寧に描き出していきます。

◆言葉の奥で揺れ動く心模様

一見、淡々とした日常的な時間の流れの中で物語が進行していく本作。しかし、微細な日常を顕微鏡で拡大したかのように、主人公と彼を取り巻く登場人物たちが積み重ねていく会話からは、抗いようのない悲哀や心の渇きが滲み出てきます。

日々の生活に重く漂う閉塞のもとに生きる人々のやるせなさや慈しみを描き出した本作を、コロナ禍のこの時代に上演することについて、演出の栗山は次のように語っています。

「この『夏の砂の上』の風景の中を流れるジリジリとした熱い感情と、しかし静かに刻む時間の一刻一刻に身を任せ、この荒涼とした現在から、そこにその時生活していた人たちを見つめてみたい」

劇中であからさまに語られることのない“熱い感情”は、登場人物同士の関係性と積み重ねられる会話によって、静かに、濃密に浮かび上がってきます。

同じ九州に位置する長崎と宮崎。宮崎の会場に響く長崎弁の台詞からは、その言葉の奥で揺れ動く登場人物たちの心模様が、より細やかに伝わってくるかもしれません。

<あらすじ>

ある地方都市、坂のある街。坂にへばりつく家々は、港を臨む。港には錆ついた造船所。夏の日。

造船所の職を失い、妻・恵子に捨てられた小浦治のもとに、家を出た恵子が現れる。恵子は4歳で亡くなった息子の位牌を引き取りに訪れたのだが、治は薄々、元同僚と恵子の関係に気づいていた。その時、治の妹・阿佐子が16歳の娘・優子と共に東京からやってくる。阿佐子は借金返済のため福岡でスナックを開くといい、治に優子押し付けるように預けて出て行ってしまう。治と優子の同居生活が始まる。

公演情報

『夏の砂の上』

12月3日(土)、4日(日)

開場 13:30 / 開演 14:00 ※両日とも

会場:メディキット県民文化センター (宮崎県立芸術劇場) 演劇ホール

【作】松田正隆 【演出】栗山民也
 【出演者】田中圭、西田尚美、山田杏奈、尾上寛之、松岡依都美、粕谷吉洋、深谷美歩、三村和敬



田中 圭 西田尚美 山田杏奈 尾上寛之 松岡依都美 粕谷吉洋 深谷美歩 三村和敬

佐渡 裕

《ブラスの祭典2022》の舞台裏を語る!

インタビュー・構成:富樫鉄火(音楽ライター)

この12月11日、宮崎において、《佐渡×シエナ ブラスの祭典2022》と題するコンサートが開催される。いまや世界を股にかけて活躍する指揮者・佐渡裕と、日本を代表するプロ吹奏楽団、シエナ・ウインド・オーケストラの、ひさびさの共演だ。コンサートを前に、シエナ首席指揮者でもある佐渡裕に、その思いを聞いた。

——今回もユニークな内容のコンサートですが、**どういう経緯で、このような選曲になったのでしょうか。**

佐渡 2020年春ごろから、新型コロナ禍の蔓延がはじまって、コンサートも次々と中止。ほくも自宅に閉じこもる生活になりました。その間、次にシエナとどんな曲をやるうかと、あれこれ考えをめぐらせていました。ほくが初めてシエナを指揮したのが1997年。ほぼ四半世紀が経過しています。もう一度やりたい曲もあるし、その一方で、新たな曲にも挑んでみたい。そんななか、ふと、エマーソン・レイク&パーマー(EL&P)の《タルカス》を思い出し、ひさしぶりにCDを聴いたんです。そうしたら、これが、なかなかいいんですよ(笑)。2012年のライブですが、あれ以降、再演もされていない。この閉塞的な社会状況を突き破る意味でも、もう一度やりたいと思うようになったんです。

——**佐渡さんは、EL&Pの中心メンバーで、キーボード奏者のキース・エマーソンと、お会いになったことがあるそうですね。**

佐渡 そうなんです。シエナとのライブから数年後、ある方の紹介で、来日中のキースと会うことができました。ほくとシエナの《タルカス》のCDも聴いてくれていて、大絶賛してくれました。結局、恵比寿のバーで、明け方近くまで、語り合ってしまったほどです。ただ、残念ながらキースは、腕の筋肉に病気を抱え、演奏ができなくなったことに悩み、2016年に自ら命を絶ってしまいました。できれば、生前に、一度でいいから、ほくとシエナの《タルカス》を実演で聴いてほしかったんです。今回のコンサートで1曲目に《タルカス》を取り上げたのは、天国のキースに捧げたいという思いもあるんです。

——**1曲目から、超重量級の難曲ですが、後半の《展覧会の絵》も、これまた重量級です。演奏する方々は、たいへんでしょうねえ。**

佐渡 シエナだから大丈夫だろうと思って……、いや、やっぱり恨まれているかな(笑)。実は、よく意外に思われるんですが、ほくは《展覧会の絵》全曲を指揮したことは、まだないんですよ。ぜひ、一度やってみたいと思ひまして……でも、その後、この選曲でいいかどうか、けっこう悩みました。

——**ウクライナ問題ですね。**

佐渡 ロシアがウクライナへの侵攻をはじめたのは、本年2月です。そうしたところ、コンサートからロシアの作曲家の曲が、どんどん下ろされるようになった。もちろん、ムソルグスキー《展覧会の絵》をやることは、それ以前に決まっています。しかし、この曲は、特に戦争にまつわる音楽ではないし、なにより、終曲の〈キエフの大門〉は、ウクライナの首都キエフ(キーフ)にある「黄金の門」が題材です。11世紀のキエフ大公国時代につくられた城壁の入口の門ですね。いま

建っているのは、近年の復元ですが、ウクライナ文化を象徴する史跡として人気がある。ムソルグスキーは、明らかに、この史跡に対する敬意を音楽化しています。そこで、いまこそ多くのみなさんに聴いていただくべきだと考えるようになりました。

——**ところで、佐渡&シエナのコンサートといえば、なにが飛び出すかわからない「音楽のおもちゃ箱」コーナーが、いつも楽しみです。しかし今回は、すでにテーマが発表されているんですね。題して「丸ちゃんForever」!**

佐渡 昨年12月に76歳で亡くなられた、大阪府立淀川工科大学吹奏楽部の顧問、丸谷明夫先生を追悼するコーナーです。全日本吹奏楽連盟の理事長もつとめられた、日本における吹奏楽振興の大功労者です。ずっと年上なのに「ちゃん」づけは失礼かなとは思っていますが、もう長いこと愛称でお呼びしていたので、堂々と『丸ちゃんForever』とさせていただきました。

——**まさに、佐渡さんが吹奏楽に興味を持つきっかけとなった方だそうですね。**

佐渡 1974年のことです。ほくは京都市立四条中学校の1年生だったんですが、吹奏楽コンクールの関西大会が京都府会館で開催されました。そこで初めて、淀工の演奏を聴きました。課題曲が河辺公一さんの《高度な技術への指標》。そのときの指揮が丸ちゃん。もう大感動でした。音が、ものすごい勢いでこっちへ飛んでくる。しかも、あんな難しいジャズ・ポップス調の課題曲を、実に楽しそうに演奏してるんですよ。カッコいいなあ、吹奏楽っていいなあ、憧れました。その後、彼らはそのまま全国大会へ進出しました。この年が、淀工初の全国大会で、それから40年以上、連続出場することになる最初の年でした。ほくとシエナは、以前よりこの《高度な技術への指標》をレパートリーにしている、CD『ブラスの祭典3』にも収録していますが、それは、あのときの原体験があるからなんです。

——**その丸谷先生と淀工が、2021年度の吹奏楽コンクールに参加しないとの知らせは、吹奏楽界にとっては衝撃のニュースでした。**

佐渡 ほくも驚いて、すぐに電話したら、「体調がよくないんですわ……」と、力のない声で話すんです。昨年8月ごろでしたが、もうかなり悪くなっ



2010年「3000人の吹奏楽」にて、在りし日の丸谷先生と

ておられたんですね。結局、12月7日に逝去されました。その後、今年1月の淀工のコンサートにサプライズ出演することになり、その練習もかねて、ひさしぶりに淀工を訪ねました。ほくとしては、つらくなるので、極力、笑顔で練習していたんです。そうしたら、生徒が、「お願いですから、これを指揮していただけませんか」と、なにやらボロボロの紙の束みたいなものを持ってきた。それは、丸ちゃんが使っていた、アルフレッド・リード《アルメリアン・ダンス》パート1の、フルスコアでした。ほとんど丸ちゃんが広めたような名曲ですよ。開いたら、書き込みだらけで、いままでも演奏した場所や日時も書かれている。この瞬間、涙があふれてきて、号泣してしまいました。さらによく見ると、下の方に、コンデンス・スコア(簡易譜)が貼り付けてある。いかにもむかしながらの吹奏楽部の先生だなあと、泣きながらもうれしくなってしまったことを覚えています。

——**そんな丸谷先生との思い出の曲を演奏することになるのですね。どんな内容になりそうですね。**

佐渡 それは当日までの秘密です(笑)。でも、淀工ファンなら、ある程度、推測できるんじゃないですか。もう、丸ちゃんの、あの笑顔やダミ声に接することができませんが、音楽は残ります。音楽の素晴らしさは、そこにあると思っています。丸ちゃんもキース・エマーソンも、もうこの世にいませんが、彼らの愛した音楽を奏でることで、いつでも“会う”ことができる。そして、大昔のキエフ大公国に思いを寄せることによって、ウクライナの人びとの心にするこでも寄り添うこともできる。そんなことを感じていただけるコンサートになると思います。ぜひ、楽しみにしてください!

公演情報

佐渡 裕 指揮 シエナ・ウインド・オーケストラ演奏会

《ブラスの祭典2022》

12月11日(日) 開場 14:15 / 開演 15:00

会場:メディキット県民文化センター(宮崎県立芸術劇場) アイザックスターンホール

【出演者】佐渡裕(指揮)、シエナ・ウインド・オーケストラ(吹奏楽)

【プログラム】キース・エマーソン&グレッグ・レイク:『タルカス』
 音楽のおもちゃ箱 ~特別編「丸ちゃんForever」
 ムソルグスキー:『展覧会の絵』

加藤昌則の
聴かぬなら
聴かせてみせよう!!

クラシック音楽をより楽しく!
レクチャー型コンサートシリーズ!
ついに開講!!

クラシック音楽には「難しそう」「敷居が高い」「長い」といったイメージをお持ちではないでしょうか?
本シリーズでは、そうしたクラシック音楽を、分かりやすい解説を交えて紹介することで、面白さをお伝えいたします!



加藤昌則
(ピアノ・ナビゲーター)

クラシック



ニコ試験に
出まーす♪

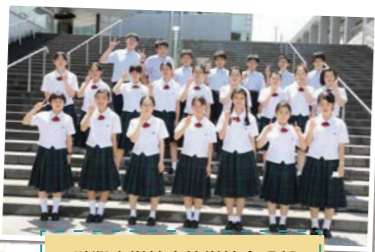
2022 12 24 (土) #1 公演 テーマ 宗教音楽

Q 宗教音楽をテーマにどんな話をするのですか!?
そもそもクラシック音楽の歴史は、宗教音楽から始まります。教会で神様に祈りを捧げる歌が、各地で勝手に変えられたりして、正しく歌われていないので、それを統一するために楽譜として記述されたのが最初だからです。そしてこの宗教音楽の発展がクラシック音楽の発展そのものなのです。どう発展したかをお伝えします。

Q 具体的にどんな風にその発展を伝えるのですか!?

宗教音楽と言うと堅苦しい印象を持たれるかも知れません。だからみなさんご存知の「カエルの歌」を使って、その発展の流れをご紹介しますと思います。これならとっても身近だし、わかりやすいと思って。

そして楽譜という記録に残らなかっただけで、愛だの恋だの我々に身近な世俗音楽というのが実はあったのです。だから宗教音楽を知ることにも通じるんですよ。



鵬翔中学校高等学校合唱部

公演情報
加藤昌則の「聴かぬなら聴かせてみせよう!!クラシック」#1
2022年12月24日(土)
開場 13:30 / 開演 14:00
会場:メディキット県民文化センター(宮崎県立芸術劇場) イベントホール
[出演者] 加藤昌則(ピアノ・ナビゲーター) 鵬翔中学校高等学校合唱部

2023 1 21 (土) #2 公演 テーマ 室内楽

Q 室内楽をテーマに選んだ理由は!?
ヨーロッパでは室内楽というのが実に身近なものであります。オーケストラの演奏会の方が敷居が高めで、日常的に室内楽の方が楽しまれていたようです。それを理由に作曲家は実にたくさんの室内楽作品を残しているのです。オーケストラは人数が多いし、大きな音圧を味わえますが、室内楽は指揮者がいない分、個々の演奏家の息遣いや緊迫感を間近で感じ取れる魅力があります。それを味わってもらうためにゲストを呼んでいます。

Q どんな曲を取り上げますか?
シューマンのピアノ四重奏曲を全曲演奏します。この曲、全部で4つの楽章があるのですが、それぞれで室内楽の、音楽の醍醐味を味わえてしまう傑作だと思っているのです。特に第3楽章は、誰が聴いても美しく酔いしれちゃうメロディーを、なんと奏者がそれぞれ順番に演奏するのです。もちろん演奏家は気合いを入れて演奏するわけですから、退屈するわけがない!そして最後の楽章は、スピード感があって、とてもエネルギーが盛り上がり、音楽に興奮を覚えます。聴いてみたいでしょ!?室内楽の、シューマンの虜になりますよ。



公演情報
加藤昌則の「聴かぬなら聴かせてみせよう!!クラシック」#2
2023年1月21日(土)
開場 13:30 / 開演 14:00
会場:メディキット県民文化センター(宮崎県立芸術劇場) 演劇ホール
[出演者] 加藤昌則(ピアノ・ナビゲーター)、川田知子(ヴァイオリン) 須田祥子(ヴィオラ)、向井 航(チェロ)

パイプオルガン見学・体験会 オルガン ふしぎ発見!

これまで劇場に寄せられた「パイプオルガンを見学してみたい!」「一度でいいから演奏してみたい!」というお客様の声にお応えして、この夏、パイプオルガン見学・体験会「オルガンふしぎ発見!」を2日間にわたり開催しました。初めての試みでしたが、子どもから大人まで計91名の皆様にご参加いただき、オルガンの魅力を発見していただきました!
[参加者] 親子クラス:38名 / 子どもクラス:27名 / 大人クラス:26名

密着レポート



START!

司会の伊豆謡子さんの「シャツをよく見ると、手作りのオリジナルTシャツ!」

まずは、見学ツアーに行く前の肩慣らし♪パイプの数や長さなど、パイプオルガンにまつわる3択クイズに挑戦です。間違っても、「そうだったのか!」と楽しそうでした。



クイズの後は、いよいよ各チームに分かれて、見学・体験ツアーに出発!ワクワク感が高まります。

3つのポイントを全部まわると、オルガン博士に!?

オルガンふしぎ実験室



◀最初のオルガンといわれている水オルガン。水圧を利用して音が鳴るしくみに興味津々。

風呂椅子とリコーダーで作った職員お手製の水オルガンで実験!



▲次はふいご体験!昔は人の手でふいごを動かして、パイプに風を送りこんでいました。体験では、紐を引っ張り、ふいごの蛇腹を開閉させて風を送ります。想像以上に力が要る~!

ポジティブオルガン (小型オルガン)



▲おそろおそろ鍵盤に触れる参加者たち。音が出ただけで「おお~」と盛り上がる場面も。



▲パイプの素材や構造を間近で見学。リコーダーのような「フルー管」と、クラリネットのようにリードが振動する「リード管」。覚えてくれたかな?

大オルガン



◀普段は客席から遠くてよく見えない演奏台。間近で見ると、4段の手鍵盤と足鍵盤、音色を変えるストップ(音栓)など、見るどころがいっぱいです。



▲オルガンの中を探検すると、そのパイプの数に圧倒されます!パイプ1本で1つの音しか出せないパイプオルガン。多くの音色を出すために、たくさんのパイプが必要なんです!



◀オルガニストの北川倫代さんと稲森愛さんの演奏を鑑賞した後は、いよいよ試奏体験!演奏する前は緊張していた参加者も、演奏後は、感動と興奮で胸いっぱいの子供達でした。

参加者感想 (抜粋)

今回の鑑賞時から、オルガンの仕組みも考えながら聴いてみたいと思います。

普段はできない体験ばかりで、驚きの連続でした。

とても分かりやすい解説で、楽しく学ぶことができました。

パイプオルガンの中に、あんなに沢山のパイプが詰まっている事に驚きました。

試奏体験では、音が全身に響いて幸せでした。

公演情報 好評発売中!
パイプオルガン プロムナード・コンサートvol.173「オルブラ」
12月17日(土) 開演 11:00

[出演] 山口綾規(オルガン)、河野幸子(ソプラノ)、伊豆謡子(司会)
[料金] 4歳以上500円、なかよしチケット(4歳以上2人1組)700円
※ランチセット券は完売しました。

《プログラムテーマ》
Christmas Wishes
(クリスマス・ウィッシュ)



公演の詳細はこちら↓
QRコード

劇場休館のお知らせ

宮崎県立芸術劇場では、耐震性の強化を図るため、施設設置者である宮崎県による天井の改修工事の実施が見込まれております。

この工事実施予定に伴い、下記のとおり施設を休館する予定です。

施設のご利用や公演の鑑賞でご来館いただいている皆様には、ご不便をおかけすることになり、大変心苦しい限りですが、ご理解とご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。
※工事期間等、詳細についてはわかり次第、劇場ホームページ等でお知らせいたします。

期間の目途

令和5年夏～令和6年

令和5年8月以降の施設利用の予約については、受付を停止いたします。



メディキット県民文化センター(宮崎県立芸術劇場) 自主事業公演チケット情報

※2022年10月14日時点の情報です。

11月6日(日) 開演 14:00 イベントホール	ひなたのパロック#3 クラヴサンのための音楽とロココの絵画 【出演】大塚直哉(企画、監修/チェンパロ)、小林亜起子(美術史家)、市瀬陽子(古典舞踏家) 〈全席自由〉 一般2,000円(1,800円)/U25割1,000円	チケット発売中
11月26日(土) 開演 14:00 アイザックスターンホール	「ローマの休日」全編上映ライブコンサート ※原語(英語)上映/日本語字幕付き 【出演】ローマ・イタリア管弦楽団 〈全席指定〉 S席7,500円(6,700円)/S席ペア14,000円(12,600円) ※前売りのみ/A席5,000円(4,500円)	チケット残りわずか
11月30日(水) 開演 11:00 地下大練習室 2	はじめてのクラシック♪#14 ~ピアノ~ 【出演】高場涼子(ピアノ) 〈全席自由〉 大人500円/子ども(未就学児)無料 ※定員/親子14組(1組3名まで。子ども含む) ※料金は当日受付にてお支払いください。	申し込み受付中 締切:11月2日(水) 17:00
12月3日(土)・4日(日) 開演 14:00 演劇ホール	夏の砂の上 【出演】田中圭、西田尚美、山田杏奈、尾上寛之、松岡依都美、粕谷吉洋、深谷美歩、三村和敬 〈全席指定〉 S席7,000円(6,300円)/A席5,000円(4,500円)/B席4,000円(3,600円)/U25割 全席種半額	チケット発売中
12月11日(日) 開演 15:00 アイザックスターンホール	佐渡裕指揮 シエナ・ウインド・オーケストラ演奏会《ブラスの祭典2022》 【出演】佐渡裕(指揮)、シエナ・ウインド・オーケストラ(吹奏楽) 〈全席指定〉 S席8,000円(7,200円)/A席6,500円(5,800円)/B席5,000円(4,500円)/U25割 全席種半額(エリア及び枚数制限あり)	チケット発売中
12月17日(土) 開演 11:00 アイザックスターンホール	パイプオルガン プロムナード・コンサートvol.173「オルブラ」 【出演】山口綾規(オルガン)、河野幸子(ソプラノ)、伊豆詠子(コンサート・ソムリエ) 〈全席自由〉 4歳以上500円 なかよしチケット700円(4歳以上2人1組、前売り券のみ販売)	チケット発売中
12月24日(土) 開演 14:00 イベントホール	加藤昌則の「聴かぬなら聴かせてみせよう!!クラシック」#1 信者じゃないのにクリスマス? 【出演】加藤昌則(ピアノ・ナビゲーター)、鵬翔中学校高等学校合唱部 〈全席自由〉 一般2,000円(1,800円)/U25割1,000円	チケット発売中
2023年1月15日(日) 開演 14:00 アイザックスターンホール	ニュー・イヤー・コンサート2023 ~ピアノソラ・ザ・ファイナル~ 【出演】三浦一馬(バンドネオン)、宮田大(チェロ)、上野耕平(サクソフォン)、大萩康司(ギター)、山中惇史(ピアノ) 〈全席指定〉 一般4,000円(3,600円)/U25割2,000円	チケット発売中
2023年1月21日(土) 開演 14:00 演劇ホール	加藤昌則の「聴かぬなら聴かせてみせよう!!クラシック」#2 しっとく なっとく まる得クラシック 【出演】加藤昌則(ピアノ・ナビゲーター)、川田知子(ヴァイオリン)、須田祥子(ヴィオラ)、向井航(チェロ) 〈全席自由〉 一般2,000円(1,800円)/U25割1,000円	チケット発売中

【Attention(ご注意)】◎記載情報は変更になる場合があります。◎()内はくれっしえんど倶楽部会員価格です。◎U25割は鑑賞時25歳以下が対象。その他の割引サービスの詳細は、劇場HPをご覧ください。◎当日券が出る場合は、一般チケットのみ500円増になります。※一部公演除く ◎託児サービス(有料・事前申込要)がご利用いただけます。※一部公演除く

Hello! けんげき

第5弾

音楽祭公式カメラマン
三浦 興一さん

劇場にゆかりのある方のコラム・メッセージを紹介するコーナーの第5弾は、宮崎国際音楽祭の写真を第1回から取り続けていただいている、音楽祭公式カメラマンの三浦興一さんにお話を伺いました。

ある音楽評論家から、「ミウラさんは僕たちの窓ですから」と言われたことを、時にあつて思い出す。音楽家の近くにいる、聴衆の皆さんが目にするのでない表情や姿を、写真を通して見せる存在が写真家だと言うことだ。過分な褒め言葉、とは思う。

「宮崎国際音楽祭」に出会って以来、音楽家と聴衆の目障りにならないよう、嫌われたりしないよう、自分としてはできるだけ控えめに見つめ続けてきた。そして、いつも幸福な気持ちになっていた。

参加者の方もゲストの方も、日本各地、世界中から「音楽」のために集まってくる。年に一度、いつもの心地よい場所に還るように、常連の音楽家の皆さんが劇場を訪れるが、産声をあげたばかりの第1回、アイザック・スターンがホールに入ってきた時は、関係者全員が緊張していた。だからこそ、演奏会が終わったステージの袖にくつろいだ姿で座り、満足そうに葉巻をくゆらす姿を目にできたのは、嬉しかった。

もう一枚の写真は、当時の青木館長をはじめとして、音楽祭を支えるスタッフたちとの記念写真。演奏する人、聴く人、企画立案や運営、そして裏方として関わっている人、皆が感動を共有できるって、すごいと思う。共に25年も前の写真だが、来年第28回を迎えようとするいまも、気持ちはあの頃のまま。窓をしっかりと磨き上げておかないでは!



©K.Miura



©K.Miura

お問合せ



公益財団法人 宮崎県立芸術劇場
MIYAZAKI PREFECTURAL ARTS CENTER

〒880-8557 宮崎市船塚 3-210
http://www.miyazaki-ac.jp/

TEL.0985-28-3208 FAX.0985-20-6670



Twitter and facebook 随時更新中! 「フォロー」と「いいね!」お待ちしております